

武者小路実篤『世間知らず』論

——主人公の自己成長に着目して——

楊 琇 媚

『二人の男』(二二二)においても、『世間知らず』について次のように書いている。

殊に房子には、房子に相談もせず、この小説を発表したの
で、この小説のおかげで自分は随分誤解され損をしたと不
平を言われたものだ。そういう結果になったとしても、当
時正直病にかかっていた僕は仕方がないと思っていた。^③(傍
線は引用者。以下同様)

『世間知らず』は大正元年十一月に洛陽堂より出版された作品である。この作品は武者小路の最初の中編小説『お目出たき人』(明治四十四年)につぐ第二の中編である。そして、『お目出たき人』が失恋小説であったのに対して、『世間知らず』は得恋小説であると言われている。^①武者小路が自伝小説『二人の男』(二二二)で、「房子がどういふ人間か、なぜ僕は房子と結婚したか、この事は僕の小説『世間知らず』を読めばわかる^②」と書いているところからも分かるように、『世間知らず』は作者の第四の恋を素材として書かれた自伝風の小説である。

武者小路は後に書いた三人称の自伝小説『或る男』においても、『世間知らず』に書かれたAとC子の出来事をほぼ再現している。また、上述した伝記と言われている一人称の

このように、武者小路は『世間知らず』が刊行された後、いろいろな場でこの小説について証言しているので、従来この小説は作者の実体験そのままと見られてきた。
この作品は女主人公C子の多数の書簡や主人公Aの記述^④によって構成されている。主人公Aが女主人公C子と出会ってからC子との結婚を決心するまで、僅か二ヶ月あまりしか

い。最初に面識のないC子からの手紙を読んで、「図々しい女もいるもの」だと思つたところから、以後の手紙のやりとりや、逢引きを経て、結婚に至るまでのスピーディーな経緯には、我々読者は唐突な感じを受けざるを得ない。

『世間知らず』の自序で武者小路は、「お目出たき人」を公けにした自分にはこの小冊子を公けにする義務があるやうな気がする」と言っているように、姉妹作『お目出たき人』と結びつけようとしている。

では、(失恋と得恋といった意味では)一見対照的な両作品は一体どのような関連性を持つているのか。また、武者小路は『世間知らず』を通して、何を表現しようとしているのか。本稿では、『お目出たき人』との接点に触れながら、本作品のテーマを探ってみたい。

二

『世間知らず』と『お目出たき人』の関連を見るために、まず、両作品の主人公が同一人物であることを検証する必要がある。この点について、以下のように見ていく。

現在の『世間知らず』は、付録としてAよりC子宛の手紙からなる書簡集「AよりC子に」を収めている。「AよりC子に」は大正六年七月、我孫子刊行会の『不幸な男』に初め

て収録された。注意すべきは、「AよりC子に」には「世間知らず」の主人より女主人公に」と題するものが書き加えられているということである。つまり、Aは『世間知らず』の主人公で、C子はその女主人公である、ということが分かる。また、十月二十三日の手紙に以下のような記述がある。

お前は何を怒つてゐるのか。少しもわからない。「お目出たき自分は……」と小説の中にかいてあるのを怒つてゐるのかい。俺は「お目出たくなかつたら」お前との事件はかう發展させることが出来なかつたのにちがひない。「お目出たき自分は」と云ふのは「お目出たき人」の主人公に「世間知らず」の主人公をむすびつける為にもかいたのだが、事実俺はお前を何度も疑がつたよ。⁵⁾

八月六日の手紙に「僕の今度かいてゐる小説(世間知らず)はあんまり正直で少し君に気の毒だ」という記述があるように、ここでの「小説」とは『世間知らず』のことを指しているのである。さらに、「お目出たき人」の主人公に『世間知らず』の主人公をむすびつける為」云々からは、「A」『世間知らず』の作者『世間知らず』の主人公『お目出たき人』の主人公」という図式が出来上がり、両作品の主人公は同一人物であることも明らかになる。

実際、『世間知らず』では、雨の日にAがC子と相合傘で歩きながら、「自分はこの時程C子を可愛いと思つたことは今までになかつた。自分はC子の自分の好きな目の方に接吻した。その目は自分が曾つて恋した鶴の目に似てゐた」と思うようになり、C子に過去自分が恋した女性の姿が投影されている。周知のように、鶴は『お目出たき人』の主人公が片思いを抱いた相手である。その一人相撲とも言える恋愛の相手であつた鶴が『世間知らず』の主人公のかつて恋した女性として、本作品に登場していることは、両作品の主人公が同一人物であるということの証明に他ならないであろう。

三

『お目出たき人』では、女主人公鶴のことを「マリアのやうな顔の形」「ビーナスのやうな目」を有する「優しくつて、美しくつて、淋しくつて温和しさうな、それで可なり快活な女」と言っていることから分かるように、主人公は彼女のことを理想的な女性として築き上げている。これに対して、『世間知らず』のC子のことを、「ヒステリー」「売淫婦」「色情狂」などの言葉で形容しており、C子はあたかもエキセントリックな女性であるかのように思わせている。

確かに、このように両作品で描かれている恋愛対象の女性

像は一見まったく対照的である。しかし、第一印象では「ヒステリーのような」「変な女」とされるC子は最終的には主人公に認められ、結婚するまで至っているわけだから、C子はある意味では主人公の意中の人と言えるのではないか。つまり、果たして両作品の女主人公は、主人公がそこまで区別するほど異質な存在であると言えるのかは疑問である。

『お目出たき人』の女主人公である鶴の心境は初めから終わりまで少しも描かれていない。彼女を具体的に登場させていないため、この作品が主人公の一人よがりの作品になっていることは周知の通りである。つまり、作中に描かれている鶴の姿はもっぱら主人公の一方的な想像によるものである。鶴が醜くなつたり、不具になつたとしても、「鶴の性格を愛してゐる心算である」とは言うものの、話したこともない主人公にとって鶴の本当の性格を知るはずもない。しかし、こうした主人公の想像からは彼の理想とする女性像を窺うことができると思われる。

「自分は女に餓えてゐる」というフレーズを繰り返している主人公は、一方で「自分の仕事をすて、まで鶴を得やうとは思はない。自分は鶴以上に自我を愛してゐる。いくら淋しくとも自我を犠牲にしてまで鶴を得やうとは思はない。(中略) 自我を犠牲にしてまで鶴と一緒にならうとは思はない」とも言っている。つまり、いくら女に餓えていても、鶴

を得ようと思つても、自我を犠牲にすることはできないといふ姿勢には、自我の重要性も示されている。そして、鶴への縁談話が鶴の父に拒絶された時には、彼は鶴の性格を次のように決め付け、苛立ちを見せている。

彼女の心は見ることは出来まい、彼女はとらわれてゐる女であらう。父と兄に自分の運命をたくしてゐる女であらう。それをい、ことに思つてゐる女であらう。(中略)かゝる女に自我はない。(八)

鶴は自分を愛しているかもしれない。しかし、彼女は自分の意思のままに行動することができない、いわゆる囚われてゐる女のため、縁談を断つたのは決して彼女の意思ではないといふ。挫折した主人公はそう思うしか自分の苛立ちを抑えることができないのであらう。つまり、裏返して言えば、主人公は鶴が自我のある女性、または自分自身で運命を切り開く女性であつて欲しいといふことになる。ここでは、これだけ自我を強調してきた主人公が自我を貫く女性を理想的だと考えていることが、まず確認できよう。

これに関連して、『世間知らず』では、C子は自己主張に満ちた手紙を書いたり、親に決められた縁談に従わない行動を取つたりしていることなどから、一本気で自我意識を強く

持った女性であることが分かる。そしてその性質こそが主人公の憧れであつたとも言える。つまり、『お目出たき人』で求めた自我を持つ女性は、C子そのものであるため、主人公はそんな彼女の性格に惹かれないわけがない。このように見れば、主人公が『青鞥』風の自我のはっきりした女性C子に惹かれるのは、決して『お目出たき人』の「失恋の反動」というわけではないであらう。

しかし自由で自我のあるC子に惹かれたAではあるが、結局彼も世間一般の男であり、いったん男のプライドが傷つけられるようなことを言われると、警戒心を抱かざるを得なくなるのである。

どんな男でも私を得たら世に限りない宝をもつてゐる程誇を持つことが出来ること、おもひます。(中略)淋しい貴君の姿を想ひます。そして哀ないろくの男を想ひます。世の中の男はみんな動物性の女に飽きてもの哀れなうら悲しい顔をして居ます。／動物性の女は小供をこしらへるより外は何のこともしりません。私は男の人を哀れみます。

(後略) (四)

以上の引用は、C子がAに送つた手紙の内容である。AはC子の自己主張に満ちていて、つけあがっているように見え

る手紙を読んで、C子が自分を攻撃してきたような不安を感じて、C子に絶交するような宣言をした。すると、C子がすぐに謝罪の手紙を出して、その手紙を読んだAはC子と仲直りした。

このように、Aを怒らせてしまつて突き放されそうになるたびに、C子は謝罪し、甘えるような態度を取る。特に、C子の自分を頼つて尊敬するような内容の手紙を読むと、「すっかり嬉しく読んだ」「くり返し読んでは微笑んだ」「だんだんC子がすきになつた」「たゞ嬉しく思つた」といったAの心情描写からは、彼が一歩一歩恋愛のわなにはめられつつあることが察せられる。かつて『お目出たき人』で、彼は「自分は更に愛するものと、頼つてくれるものを望む」と告白した。彼もまた自分を頼り、自分に甘える女性を求めていた。

そして、「私が尊敬した人は一人もございません。しみじみ貴君が尊く思はれます」とか「私は今では親に頼りますより、やつぱしあなたにおたよりしたい方がたくさんになつて居ります」というC子の告白が何度も繰り返されていくうちに、主人公の警戒心も次第に弱まつていき、彼女を信じるようになるのである。

最初はC子の傲慢さがAによって減退させられているようにも見えるが、しかしよく考えれば、それはAと結びつくための、C子の巧みな手腕だとも考えられる。つまり、C子は

Aの心理（世間一般男性の心理とも言える）を深く洞察し、終始哀願の態度を取ることで、Aの同情を得るようになり、最終的にはAと結び付くことができたのである。それは、「自分がC子に甘くやられた」とA自身が自覚している通りである。途中、Aは「この時自分はC子を押えつけてゐる心算で、何時のまにかC子の云ふ通りになつてゐる」ことに気がついたが、しかし止めようとしなかつた。なぜなら、「C子は女で、自分は男」であり、二人が恋をしていたからである。確かに、作品で描かれているC子の外見からは、彼女は鶴のような良家の女と呼ぶには程遠い存在であろう。しかし、彼女の内的性質が明らかになるにつれて、主人公もいつの間にかC子を「愛と自負と謙讓な心がある」理想的な女性として認識するようになるのである。

このように、『お目出たき人』に見る彼の理想的な女性像はC子の人物像にも投影されているため、C子はまさしく主人公の意中の人だと言えるのではないか。

四

武者小路は『或る男』において、『世間知らず』の創作動機について次のように触れている。

この小説は彼の結婚を書くのが目的ではなかつた。彼は一方こゝで告白もしたかつた。又房子に瞞されてゐるやうに思はれるのもいやだつたのも事実だ。だがそれだけではなかつた。彼はこゝで自棄に落ち入つた女が、信用されることによつて、希望をとり戻す経路が書きたかつた。又一度道をふみ迷つた女が、あと戻りが出来ないやうに人々が思つてゐることに反対したかつた。⁷⁾

確かに、作品においては、世間に見捨てられてゐるC子に同情し、愛し、そして最後に周囲に反対されながらも、結婚するに至つたAは救世主のように見えるため、一見作者の創作動機とも一致しているかのである。

しかし、作品を深く読んでいけば、「よく書けているのは主人公の気持ちである」という本多秋五氏の指摘にもうなずける。この本多氏の指摘を裏付けるのは、C子との交際過程中に見られるAの大きな心境変化である。この章では、『お目出たき人』と合わせながら、主人公の変化を見ていくこととする。

① 性の問題に対する認識

『お目出たき人』の主人公は性欲を自然の本能として肯定し、手淫をも正当なものだと考えるようになったが、後ろめ

たさをも感じているという。ところが、彼は「いくら女に餓えても芸者遊びは断じてしないでよさうと思」つており、彼にとつて女に餓えることは自然であるが、芸者遊びは自然ではないのである。しかし一方で、主人公が友人と道楽について議論している場面からは、彼のためらいをも窺うことができ、また内心で激しく葛藤している様子も感じられるため、武者小路の「自然」主義がこの性の問題に関してはまだ確立されていないことが考えられるのである。

ところが、それから二年後の作品である『世間知らず』において、主人公Aは女主人公C子と二回目に出会つた時点ですでに関係を結んでおり、ここから、作者の心境が大きく変化していたことが想像される。この点について、以下のように検証していく。

C子が来訪の際、初めはAは「非常な不愉快を感じた」が、そのうちに段々不愉快がなくなつて、「C子の頬や首すじや喉を彫刻物をさするやうにさすつて見たい」という気持ちにまで変わった。初対面であるにもかかわらず、この時点のAはすでにC子をエロスの対象として認識していることが推測できる。また、この時のAは「女に餓えている」と告白する『お目出たき人』の主人公を想起させる。そして、一週間後遠足先でC子の子供が生まれぬという保証のもとで二人は関係を結んだ。

C子とは正式に付き合っているとは言えないし、「その時C子と結婚しようと言う気はなかった」と思いながらも、C子と「深か入りするだけ深か入りしてしまった」のである。こういったAの態度は道楽だと言っても過言ではない。この時の心境についてAは次のように述懐しており、以前とは大きく異なっていることが分かる。

自分は既に二三年前の自分ではなかった。自分の心は童貞からよほど遠ざかつてゐた。自分の心の内ではなんだかあせるものが居た。(八)

ここで再び、『お目出たき人』における友人との道楽について議論している場面に戻ってみよう。主人公は「君が女に恋されやうと思つたら、プラトニックな考をすてなければいけない。(中略)先づ女の肉体を占領せよ、女の精神はその内にあり、と云ふのが女を得る秘訣」という友人の忠告に耳障りを覚えてゐる。しかし、『世間知らず』では、彼はC子と二回目に会つた時点で、まるでプラトニックの考を捨てたかのように、彼女の手を弄つたり、喉を擦つたりして、性欲を感じてしまふようになるのである。

「二三年前の自分」とは、『お目出たき人』の頃における性の問題に激しく葛藤している「自分」であろう。そこから脱

却した彼がまさしく『世間知らず』のAなのである。つまり、『世間知らず』において彼は性の問題に対する認識を確立させて、以前の抑圧から解放されていると考えられるのである。実際、彼はC子と関係したことに對して「不安がなかつた」とか「何が起つて来てもそれは自分を成長させることにすぎない」と思うようになり、『お目出たき人』の「自分」との間に一線を画するように、高い成長意欲を見せている。

② 世間に対する態度

『お目出たき人』の主人公は、「鶴と夫婦になりたいと思つた時に先づ心配したのは近処の人に冷笑されることだつた」と言っているように、最初から既に世間を気にする考えを持っている。しかしそれと同時に、「そんなことを顧慮して自分と鶴の幸福を捨てるのは馬鹿氣であると思つた」とも言っており、世間を気にしないように努力しようともしている。

しかし、その後の主人公の行動や様々な葛藤から考えれば彼は世間を完全に克服することができなかつた。さらに、そういう世間に対する態度は『世間知らず』にまで引き摺られており、逆に遙かに強くなつてゐるかのようにも見られる。

電報用紙を掛りの人にわたす時、一寸いやな氣がした。さ

うして実家に帰るとすぐ「なかなかほり」の手紙をかいて又郵便局へ行つて速達で出した。掛員がちがうと思つたので安心して。(五)

しかしC子の金に困つてゐることは親しい友にもおくびにも出さなかつた。それを云つて自分がC子に利用されてゐるやうに思はれるのがいやだつたから。(六)

だらしく木綿の着物を羽織を着ずに着てゐる書生と、頽廢した若い女と、彼等はすつかり自分達の心を見ぬいた心算になるのは当然である。自分は俵夫から見えない処に姿をかくした。(八)

自分はその女優にC子、それも酪酒屋の女とまちがへられるC子と一緒にゐるのを見られるのを喜ばなかつた。(中略) その女優の話しや笑ひ声が聞える度に自分達のことを話して笑つてゐるのではないか知らんと思つた。(八)

鶴沼館に入ると客や女中が好奇心をもつて見た。さうして二人の風評をして笑ふのが聞えた。(中略) まだ客や女中が二人の風評殊にC子の風評をして不遠慮に笑ふ声が聞えた。(八)

「あいつはある女と關係して百円とられたよ」こんな嘲笑が壁の向ふでするやうな気がした。(十二)

長々と引用をしたが、Aが絶え間なく世間の目を気にしている姿勢が一目瞭然である。特に、C子の借金のこと、自分が利用されているのではないかと繰り返し疑うAの態度が注目される。つまり、AがC子を疑つたり信じたりすること繰り返していたのは、ほぼ彼が世間の目を気にしていたことに起因しているということである。言い換えれば、C子の人格がどうであるかに拘わらず、彼の周囲の目を極端に気にするような態度が、C子に不信の念を引き起こした最大の原因であるように思われる。

しかし、C子を信用するようになるにつれて、Aも少しずつ変化していくのである。それは、以下の引用によつても明らかである。

だまされてゐるのではないかと何度も思つたが、自分はそれよりもつよくC子を心の底では信じてゐた。(中略) C子のやうに世間を恐れない人で始めて自分の妻になれるやうな気がして来た。(中略) 自分はC子と結婚をすることを母のよるこばないことも、或友の不安に思つてくれることも尤だと思つた。しかしそれは自分とC子を知ることの少

ないからだと思つた。自分は恐れることなくゆく処までゆかうと思つた。(二十)

C子と自分とは殆んど毎日文通してゐた。(中略)自分はこんな同一の女文字の手紙が来たら、物議を起すだらうと思つた。しかし勝手に起せと思つた。又母も気がつき心配して何か云ふだらうと思つた。自分はそれをきつかけに母を承知させやうと思つてゐたので別に心配しなかつた。(二十四)

(前略) 林が「こないだ君の処から帰つて妻にその話をしたらしきりとおしがつて、折角今迄ちゃんといらしたのにと云つてゐた」と云つた。／「さうか、さうだらうね」と自分は平気な顔して云つた。自分はある不快を感じたけれども、林の細君のさう云ふのはあまり当然だから不快を感じるのが馬鹿氣てゐると思つた。(中略)だから自分は自分の結婚について惜しがられたり、不安がられたりするのはいやだつた。明らかに自分が侮辱されてゐるやうな気がするので。／林の細君が惜しがつてくれたのはもつと単純な意味にちがいない。今迄道楽もせず、ちゃんとやつて来たのが、女と關係して自由結婚のやうな結婚をするのを惜がつてくれたのにちがいない。(中略) 帰りの電車で、なぜ

自分は今度C子と結婚するかと云ふことを手紙風にかいて、今度の結婚に反対しさうな人に見せやうかと云ふ気がした。(二十五)

以上の引用からは、世間を恐れなくなりつつあるAの姿勢がうかがえる。特に、「世間知らず」執筆の現実的モチーフ^①と思われる最後の引用の傍線部が注意すべき部分である。これはいわばAが世間に挑戦状を送り付けたいと考えているものと思われる。そこには、「お目出たき人」頃の自分とは違って、成長した主人公の姿が認められる。さらに、彼は同じく世間を恐れている母の「妾はい、としたつて世間で笑ひます」という言葉に対して、次のように反発している。

お母さんそれはまちがつてゐます。お母さんがあの女がいやならいやと云つて下さい。

世間の人が笑ふなんて云はれるといやな気がします。世間の人がなんと云つたつてい、ぢやありませんか。世間の人はどうせ別に考へもしないで云ふのです。そんなことを一々気にしてゐたらきりがありません。(二十五)

これは母に向かつて発する言葉ではあるが、また世間への配慮を取り払うようにと自分自身に言い聞かせる言葉でもある。

ろう。こうして、世間のことを恐れなくなって始めて彼は自己成長の道に大きな一歩を踏み出すようになったと言えるのではないか。

五

以上のように、「お目出たき人」との接点に触れながら、『世間知らず』を見てきた。確かに、「変な女」と言われるほどのC子はマリアのような顔ではないし、ビーナスのような目ももちろん有してはいない。しかし、彼女は自由で自己意識のある女性であり、また主人公を尊敬したり頼ったりする「猫のように愛撫したり押さえつけたりできる」^⑩女性でもある。これらの性質は『お目出たき人』頃の主人公が理想としていたものであるため、主人公が彼女に惹かれていくのも当然と言えば当然である。

それにもかかわらず、Aが最初なかなか彼女を恋人として認めなかったのはなぜだろうか。それは沼沢氏が言う通り、Aの「過去のひたむきなプラトニックな恋とくらべて、C子に対する『興味』を到底恋と認めることはできない」という心理が、強く働いていたもの^⑪として考えられる。だが、もう一つ考えられるのは、Aの世間の常識に囚われた思考態度そのものである。要するに、C子を信じようとするAではあ

るが、そうすることによりC子に騙され、世間に笑われるのではないかということを心配しているため、AはC子を認めることができなかった。しかし、こうした世間への顧慮が取り除かれた時、AはようやくC子を受け入れ、彼女を認めるようになったのである。

したがって、「C子の影響を受けつつ変化して行く様子」が『自分』を語り手にして語られている^⑫。この作品がもちろん「世間の常識道徳に對する挑戦」^⑬を意識していることは言うまでもない。このことから見て、『世間知らず』は紛れもなく『お目出たき人』から『世間知らず』へと成長した主人公（作者でもあるが）の成長物語だと言えるのではないだろうか。

【テキストの引用は、小学館版『武者小路実篤全集第一巻』（昭和六十二年十二月）による。なお、ルビは省略し、傍線は筆者が私に付した。】

〈注〉

① 本多秋五「解説」〔武者小路実篤集（二）現代日本文学全集第72巻〕筑摩書房、昭和三十三年三月

② 武者小路実篤『二人の男』（『新潮』昭和四十二年一月〜四十五年十二月）。引用は『武者小路実篤全集第十七巻』（小学館、平成二年六月）

による。

(3) 注2に同じ

(4) 厳密には『世間知らず』の中では、主人公はAとはされていない。この名称はのちに発表された「AよりC子に」という付録において、初めて用いられた。『世間知らず』の主人公についてもAと呼ばれることが一般となっているため、本稿においても、Aと呼ぶことにする。

(5) 「AよりC子に」の引用は小学館版『武者小路実篤全集第一巻』（同前掲書）による。

(6) 沼沢和子「お目出たき人」の恋と『世間知らず』の結婚（江種満子他編『男性作家を読む フェミニズム批評の成熟へ』新曜社、平成十年九月）

(7) 武者小路実篤『或る男』（大正十年）。引用は『武者小路実篤全集第五巻』（小学館、昭和六十三年八月）による。

(8) 注1に同じ

(9) 大津山国夫「『世間知らず』とC子」（『武者小路実篤論——新しき村まで——』東京大学出版会、昭和四十九年二月）

(10) 注6に同じ

(11) 注6に同じ

(12) 河原信義「武者小路実篤ノート——お目出たき人」と『世間知らず——』（『立教高等学校研究紀要』平成八年三月）

(13) 注1に同じ